

## T 日程・英語外部試験利用入試 1 限

科目	ページ
数 学 ①	2～13
数 学 ②	14～33
地 理	34～47
国 語	71～48

## 〈注意事項〉

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 志望学部・学科によって選択する科目・試験時間が決まっているので注意すること。

志望学部(学科)	受験科目	試験時間
下記以外の学部(学科)	数学①または国語	60分
文学部(日本文)	国 語	90分
文学部(地理)	地 理	60分
情報科学部(コンピュータ科・デジタルメディア)	数学②	90分
デザイン工学部 (建築・都市環境デザイン工・システムデザイン)		
理工学部 (機械工〔機械工学専修〕・電気電子工・応用情報工・ 経営システム工・創生科)		
生命科学部 (生命機能・環境応用化・応用植物科)		

4. 試験開始後の科目の変更は認めない。
5. 数学②・国語については、志望学部・学科によって解答する問題番号が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
6. 数学①②については、定規、コンパス、電卓の使用は認めないので注意すること。
7. マークシート解答方法については、問題冊子を裏返して裏表紙の注意事項を読みなさい。ただし、問題冊子を開かないこと。

(国語)

●法・文(哲・英文・史・心理学科)・経済・社会・経営・国際文化・人間環境・現代福祉・キャリアデザイン・GIS(グローバル教養)・スポーツ健康学部を志望する受験者は、問題(一)(二)(三)に解答せよ。

●文学部日本文学科を志望する受験者は、問題(一)(二)(三)(四)(五)すべてに解答せよ。

〔一〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの各文の傍線部から、意味・用法・漢字の表記のいずれかの点で誤用とされるものをそれぞれ一つ選び、解答欄の

記号をマークせよ。

- 1 口先三寸で詭弁を弄するのが得意な奴とは馬が合うはずもなく、氣の置けない友人にはなり得ない。
- 2 官僚にとつては、唯々諾々として反発する老獪なベテラン議員よりも、くちばしが黄色い新人議員の方が与しやすい。
- 3 社長の関心を買うために巧言を弄する彼のやり方は、殊の外、同僚からの反感を買った。
- 4 いつ嘘が露見するかと氣を揉み、終始汗顔の至りであったが、彼が機転を利かせてくれたおかげで助かった。

問二 つぎの空欄に当てはまる漢字を下のA～オの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- 1 悠々自□ (ア 適 イ 的 ウ 摘 エ 敵 オ 笛)
- 2 独断□行 (ア 先 イ 専 ウ 閃 エ 扇 オ 踐)
- 3 三□一体 (ア 身 イ 巳 ウ 位 エ 御 オ 味)
- 4 天衣無□ (ア 呆 イ 法 ウ 報 エ 縫 オ 放)

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ケータイやスマホは、現代の若者たちが人間関係をマネジメントしていくために、いまや必須のツールとなっている。しかし、いつでも誰かとつながれる環境が用意されたおかげで、皮肉にも一人にいるときの孤立感は逆に強まっている。いつでも連絡がとれるはずなのに誰からも反応がないとすれば、それは人間的な魅力が自分がないからではないか。そう感じてしまうのである。

このように、近年のネット環境が、人間関係を煽っている側面を否定はできない。しかし、人間関係への依存が強まっている理由は、それだけではないはずである。では、今日の若者たちが、常時接続された人間関係の維持に躍起になっているのはなぜだろうか。つねに誰かとつながっていないならば安心できず、一人にいる人間には価値がないと考えてしまうのはなぜだろうか。

私たちは、社会を近代化させていく過程で旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない多種多様な価値意識をもつようになった。その結果、地縁や血縁などの伝統的な共同体も、あるいは学校や職場のような社会的な団体も、かつては強かった拘束力を徐々に弱めていった。友人関係のような自発的につくりあげられる集団も、その自由度をだんだんと高めていった。しかし、制度的な枠組みが強制力を失うと、付き合いが自由になる一方で、かつてのような安定性をそこに期待することも難しくなるのである。

とりわけ、子どもたちが生活時間の大半を過ごす学校では、お互いに閉鎖的な空間のなかに置かれ、付き合う相手の範囲も限定されているため、人的資源のゼロサム的な奪いあいになり、一般社会よりも関係の格差が目立ちやすい環境にある。そのため、友だち関係を幅広く営むことができない子どもにとっては、周囲からの孤立感がさらに深まっていきやすい。かつて制度的な枠組みに人間関係が縛られていた時代には、一人でいることは「一匹狼」として羨望の対象にもなりえたが、いまや一人でいることは「独りぼっち」として軽蔑の対象にすらなってしまう。

こうして、人びとの間に生じた関係格差が、とりわけ若者たちの間では、あたかも人間としての価値を測る物差しであるかのような感覚が広がっていく。たとえば、フェイスブックなどのSNSを駆使して絶えずつながりを保持しようしたり、ツイッターなどでフォロワーの数を過剰に気にかけたりするのも、おそらくそのためだろう。自分には承認を与えてくれる他者が周囲にいるのか、さらに、そんな他者に囲まれた人間だと周囲からみなされているのか、いわば二重の意味で、他者からの評価を過剰に気にかけているのである。

もつとも、人間関係に対して敏感になった理由は、その自由化だけにあるのではない。そもそも、制度的な枠組みの拘束力を弱め、人間関係を流動化させたのは、社会の近代化にもなつて進行してきた価値意識の多元化だった。その結果、現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになってきている。しかし、それは同時に、かつてのように安定した人生の羅針盤が、現代ではなかなか見つかりにくくなったことも意味している。

明確な評価の物差しが社会に存在していた時代は、それを自分の内面に取り込んで自己評価の拠り所とするにせよ、あるいはそれに反発を示して攻撃の対象とするにせよ、いずれにしてもその物差しを標準とすることで、自己確認の基盤を確保することが割合に容易だったといえる。たとえ自分の信念に従って生きているつもりの人であっても、その信念の根拠は自身の単なる思い込みにあつたわけではなく、社会的な価値基準との関係のなかで客観性を担保されていた。

【A】ところが、今日のように価値意識が多元化してくると、自分がどんな選択肢を選んだとしても、それを選んだことに安定した根拠を見出せなくなってしまう。このとき、人びとは、身近な他者の評価にすがること、自らの選択の客観性を少しでも確保しようとする。自らの判断が妥当であつたことの根拠を、そこに求めようとするのである。

【B】このように、現代を生きる人びとは、自由化の帰結として不安定になった人間関係をマネージメントするために他者の反応に敏感になると同時に、また多元化の帰結として曖昧になった価値評価の物差しを明確なものとするためにも、他者の反応に敏感になっている。二重の意味で、人間関係のユートピア化は、また同時にそのディストピア化も招いたのである。そして、そのような感性の変容の最先端にいるのは、いつも若者たちである。彼らは、人生のステージにおいてたんに多

感な季節を生きているというだけでなく、そもそも社会の変化に適応しなければ、これからの時代を生き抜いていけないことを肌身で感じている存在だからである。

【C】このような状況の下で、たまたま運よく職場や学校での人間関係に恵まれた若者や子どもたちは、その人的資源をけつして手放すまいと躍起になり、帰宅後もネットを介してお互いにつながりつづけ、つねに相手の動向をうかがっている。また、そういったリアルな人間関係に恵まれない若者や子どもたちは、ネットを駆使して代替の人間関係を得ようとし、そこでの反応を過剰に気にかけている。人間関係の多寡こそが自分の人間としての価値を決めると思い込んでいる点ではどちらも同じであり、孤立することに対して大きな不安を抱え込んでいるのである。

【D】ところが、このように人間関係を重視する傾向がかつて以上に強まっている一方で、それを円滑に営むことも今日ではかつて以上に難しくなっている。なぜなら、先ほど指摘したように、価値意識が多元化するなかで、お互いが依って立つ地平がまったく異なるようになっていくからである。

このように困難な状況下を、昨今の若者たちはお互いにキャラをたて、それを演じあうことで生き抜こうとしている。ハロ―キティやミッフィーなどを想起すればわかるように、最小限の線で描かれた単純な造形であるキャラは、私たちに強い印象を与え、全体像の把握も容易である。それは生身の人間の場合も同様であって、あえて人格の多面性を削ぎ落とし、最小限の要素だけで性格を描き出したキャラは、単純明瞭でデフォルメされたものであるがゆえに、周囲の人びとに自らの存在を強く印象づけてくれる。また、単純なイメージで人格を固定してやれば、お互いの反応が予想しやすくなり、人間関係の見通しもよくなる。キャラは、複雑化した人間関係に安定した枠組みを与えてくれるのである。

【E】キャラとは、人間関係の先行きが不透明化し、不確実性が増しているなかで、それでも人間関係を破綻させることなく、なめらかに運営していくためのシンボル操作のひとつである。とりわけネットの世界では、人物のキャラ化も促進されやすい。意図された特定の情報だけを送受信し、一面的な人格イメージをつくりやすいためである。日常の雑多な情報を切り捨てることで、イメージを純化させやすいためである。しかし、だからこそ、キャラ化された人間関係の落とし穴も、ネット上で

は顕在化しやすくなるといえる。

キャラとは、人間関係というジグソーパズルのピースのようなものである。個々のピースの輪郭は単純明瞭であるが、それぞれが異なっているため、他のピースとは取り替えがきかない。ピースがひとつでも欠けると全体の構図は損なわれてしまうので、集団のなかに独自のピースとして収まっているかぎり、自分の居場所が脅かされることはまずないといつてよい。

しかし、それぞれのピースの形が、全体の構図のなかに収まるようにあらかじめ定められているという点に着目するならば、もしまつたく同じ輪郭のピースが他のどこかで見つければ、それは自分のピースと置き換えが可能ということでもある。現在の若者たちは、そのような状況を「キャラかぶり」と称し、なるべく回避しようと細やかな神経を使う。自分と同じ輪郭のキャラの登場は、集団内での自分の居場所を危うくするからである。ここに、予定調和を重んじる人間関係の落とし穴がある。

<sup>4</sup> 予定調和の世界とは、確かに見通しもよく、落ち着きのよいものかもしれない。しかし、そこにはあらかじめ想定された枠組みに収まりきれないような、本来の意味での多様性が存在しえない。だから、キャラの輪郭さえ合致するならば、ここにいるのは自分でなくてもよかったのかもしれないという不安が生まれてくる。自分の単独性がそこでは保証されないのである。

そもそも、私たちの人間関係は、しばしば「X」などと形容されるように、お互いに衝突する経験を通じて再構築され、次のステージへとバージョン・アップしていくものである。しかし、あらかじめ衝突の危険性を回避し、予定調和の関係を営んでいるかぎり、その付き合いがレベルアップされ、深まっていくことはありえない。良くも悪くも初期設定された人間関係が、既定のバージョンのまま延々と続くだけである。

たしかに、ケータイもスマホも、非常に便利なメディアである。生活を豊かにしてくれる道具なのだから、それなりに有効に活用すればよいだろう。しかし、ネット上でいくら濃密な関係を紡いでも、<sup>5</sup> かけがえのない自分に対する疎外感から抜け出すことはできない。私たちは、そのことにも留意しておくべきである。むしろ逆に、意外性に満ちた日常のなかにこそ、単独性の根拠は存在しているものである。そして、その単独性を獲得するためには、たとえつまずきながらであっても、リアルな人間関係を地道に歩んでいくしかない。

（十井隆義「メディアの変容 若者のケータイ・スマホ文化とキャラ的コミュニケーション」より。文章を一部改変した）

【注】 \*ゼロサム 合計すると差し引きがゼロになること。限られた市場を奪い合うような場合を指して使用される。

問一 傍線部「人間関係をマネージメントしていく」とあるが、現代社会において人間関係をマネージメントする必要があるまでの流れを本文に即してまとめた場合、A～Eの出来事の生起順として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。



A 社会の近代化が始まる

B 人間関係の格差が表面化

C 伝統的な共同体の拘束力が弱体化

D 人間関係の自由化

E 価値観の多様化

- |   |     |     |     |     |     |   |     |     |     |     |     |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア | A ↓ | C ↓ | E ↓ | B ↓ | D ↓ | イ | A ↓ | C ↓ | E ↓ | D ↓ | B ↓ |
| ウ | A ↓ | C ↓ | B ↓ | E ↓ | D ↓ | エ | A ↓ | D ↓ | E ↓ | C ↓ | B ↓ |
| オ | A ↓ | E ↓ | C ↓ | D ↓ | B ↓ | カ | A ↓ | E ↓ | C ↓ | B ↓ | D ↓ |

問一 傍線部2「今日の若者たちが、常時接続された人間関係の維持に躍起になっているのはなぜだろうか」とあるが、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 伝統的な共同体や集団に所属できない者には、個人的なつながりだけが自分の存在意義であり、そうしたつながりを持つことで人間関係の格差を少しでも是正したいと考えているから。

イ 学校や職場のような閉鎖的な空間では得られない人間関係を、開放的なネットの世界で見いだしたいだけでなく、そこで築いた人間関係が自分の存在価値を保証してくれると考えているから。

ウ 近代化によって失われた共同体や社会的な人間関係を再構築するにはネット空間が便利であり、ネット上の濃密な人間関係は現実の人間関係に勝るとも劣らないものであると信じているから。

エ 友人の数が画面上に表示され、しかもそれが第三者にも閲覧されてしまうネット空間は、リアルな世界よりも人間関係の格差が目立ちやすいため、常に周囲の動向を確認していなければ不安になるから。

オ 自分を承認してくれる他者の存在を感じることで自分の存在意義を常に確認したいだけでなく、自分が様々な人達から価値ある存在だと認められていることを周囲に誇示したいから。



問三 傍線部3「キャラ化された人間関係の落とし穴」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 本来は多面的で複雑なはずの人間関係が過度に単純化されるため、ネット世界の特徴である良い意味での多様性が失われてしまうということ。

イ 集団内で各自が演じるキャラを設定したことで人間関係の見通しはよくなるが、その初期設定はあとで簡単に変更できなくなってしまうということ。

ウ 人格のキャラ化によって他者の反応が読みやすくなる反面、全体の構図を損ねないよう配慮せねばならず、結果的に気遣いの負担が増大してしまうということ。

エ 自分の居場所を集団内に確保するために自分の人格を単純化したのに、かえって他者との差別化もしくくなり、結果的に自分の存在意義が脅かされてしまうということ。

オ 単純化されたキャラによって人間関係が円滑になる一方で、集団からはみ出す個性的なキャラの存在が容認されなくなり、自分らしさがますます出せなくなってしまうということ。

問四 傍線部4「予定調和の世界」とはどのような状態であるかを比喩的に表現している三十五字以上四十字以内の箇所を本文中より探し、最初の五字を解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五 空欄 X に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 雨降って地固まる      イ 元の鞘に収まる      ウ 石の上にも三年

エ しのぎを削る      オ 刎頸（ね）の交わり

問六 傍線部5「かけがえのない自分に対する疎外感」とはどのような心情を表したのか。つぎの形式に従って、二十字以上三十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

周囲から必要とされているのは

という不安。

問七 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 「一匹狼」と「独りぼっち」は、自分を承認してくれる仲間がない点と、自らの選択の客観性を確認する術オがないという点では同じである。

イ 子どもたちが学校ではなく常時接続されたネットの中で濃密な人間関係を求めるようになったのは、近代化によって価値観が多元化したためである。

ウ リアルな人間関係では、他者と意見が合わず苦勞するかもしれないが、そういった経験を重ねることで、自分という存在のかけがえのなさに気づくことができる。

エ 予定調和の世界から飛び出し、何が起こるか分からないリアルな日常生活を生きなければ、社会的な価値基準による自己の客観的評価は得られないままである。

オ 集団内で自分の居場所を確保するには、キャラを立てて自分を印象づければよいが、目立ちすぎると全体の構図からはみ出し、かえって自分の存在を危うくする。

問八 本文を前半部と後半部に分ける場合、後半部の最初の段落として最も適切なものを本文中の【A】～【E】より選び、解答欄の記号をマークせよ。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

祖母はひどい不信心ふしんじんだった。

ほくの場合、父方の祖母はほくの生まれる前に亡くなっている。「祖父」「祖母」といえば自動的に母方ということになるのだが、祖父もぼくが五歳のときに亡くなっている。短命の家系なのではなくて、むしろ逆で、父が八人兄弟の末っ子で、母が七人兄弟の末っ子だったからそういうことになって、母方の祖母だけがぼくが二十二歳のときまで生きていた。

祖母は七十代後半あたりから持病のリウマチがひどくなつてまったくといっていいほど歩けなくなり、八十四のときに一度アキトクキトクになつて親戚じゅうを集めてからは、ほぼ完全に寝ついた状態になつてしまつたのだが、そんな状態になつても死ぬのに三年間かかつた。

「死ぬのに三年間かかつた」というのもひどい言い方だが、あの頃の親戚全体にあつた気分はそうだった。「こんなになつてしまつたのに早くお迎えが来ないのは、おばあちゃんが不信心だからだ」ということだ。

祖母の不信心ぶりは、明治二十五年（一八九二年）生まれの人間にしてはかなり珍しいものだった。東京の女学校あたりで近代的な教育を受けた人間だったなら理解できなくはないが、祖母は小学校を一年もいかずにやめて、ひらがなとカタカナしか読めないから当然本も読まなかつた。山梨で生まれ育つたから都会の空気などもまったく知らなかつた。

実の息子と娘たちはみんな毎朝自分の家の仏壇に線香を供えるような人たちなのに、祖母だけが断固としてそういうことをしない。祖父の墓は歩いて五分程度のところにあるけれど、まだ元気だった頃も、祖母は「足が痛いから」とかなんとか言い訳を言つて、祖父の墓参りもほとんどしなかつた。鎌倉に泊まりに来ていたときに、毎朝ぼくの母がタンスの上に飾つてある祖父の写真に手を合わせるのを見て、「よくもまあ、毎朝そんなことをするなあ」というようなことも言つたらしい。

「クオリティ・オブ・ライフ」というのは、限られた時間を有意義に過ごすにはどうしたらいいかという近代的な思想だけれど、祖母のように本も読まなければラジオの教養番組も聴かない人間にとって、限られた時間をいくらかでも有意義に過ごす

方法といたら、やつぱり、神か仏に手を合わせることぐらいしか思い浮かばない。

親戚のみんなが考えていたり口にしたりを、ぼくが非難がましく書いてるように見えるかもしれないけれど、祖母のように「クオリティ・オブ・ライフ」らしい有意義な過ごし方といっても神仏を拜むことぐらいしか考えつかない種類の人間の<sup>1</sup>場合、話はそうそう近代的にすつきりとはいかない。

ほぼ寝たきりになってしまっても、残された時間で自分史をまとめたいとかヘーゲルを全巻読破したいとか、明確な目的があれば、残された時間が一日でも長いに越したことはないだろうけれど、目的らしい目的がなくて、しかも寝ている様子が楽そうに見えない人の場合、「早くお迎えがくればいい」とまわりが考えなくなるのは自然だと思う。神仏を拜んで心が平安になつて、しかも病気の苦痛から早く解放される、というのは一石二鳥でとても理に適っている。

しかし祖母は、「たまには仏さんに手を合わせるし」と言われると、返事をしないでそっぽを向いた。反論するのではなく、黙ってひたすらそっぽを向いた。かなり頑強な態度表明だ。

この態度に出られれば息子も娘もそのときはあきれて引きさがらざるをえないけれど、また何日かすれば同じことを言つて、祖母の方も同じ態度をとる。

ぼくは「不信心」という言葉を使つていて、「無神論」という言葉は使つてない。

母がよく面白がつてする話だけれど、祖母は仏さんを拜まない言い訳に、「さわらぬ神に祟り無し」と言つたらしい。「おばあちゃんもうまいこと言つたもんだよね」という母の口ぶりからすると、母はそれを祖母のユーモアとかウィットと解釈している<sup>2</sup>ようだけれど、祖母の会話にはユーモアとかウィットというような洗練されたものはなかった。

山梨出身の作家で山梨の庶民たちを描く作品を多く書いた深沢七郎の小説を読んでみるとわかることだけれど、深沢七郎の登場人物に意識的なユーモアやウィットはない。意識してなされるのは<sup>1</sup>「チヨウウシヨウばかりだ。しかし田舎の社会はそれ以上に、カン違い・トンチンカン・誤解・間抜け・愚図・粗忽<sup>そご</sup>・せっかち・早とちり・奇癖・奇行の類いがいくらでもあって、笑いはそこから引き起こされる。ユーモアやウィットでバカ笑いすることはないけれど、カン違い・粗忽・奇行の笑いはもう本

当に底抜けだから、息が苦しくなったりこめかみが痛くなったり、後頭部の少し下の盆（くぼみ）のやや上の肉が柔らかくなっているところが、笑いすぎてズキズキしてくるくらい笑う。

それで「さわらぬ神に祟り無し」と祖母が言うとき、祖母がユーモアでなくて真面目に言っていたとすると、祖母の不信心は無神論どころか、日頃仏さんに手を合わせている人よりもずっと本気で神や仏の存在を信じていて、しかもそういう存在を「祟る」と考えていたからだということになる。

X

を越えていて、人間に対して善く出るか悪く出るかわからない。拝もうがお供えをしようが、相手は何しろ

X

を越えているのだから、人間が期待する善悪なんかと全然違う原理を持っていて、いったんその蓋を開けてしまっ

たら人間はひたすらホンロウ（ウ）されるしかない。祖母の考えていたこととしてはつまりこういうことで、だから祖母は神や仏に触れないようにした。——と考えると話のつじつまは合うし、ぼくは長いことそういう風に推論していたけれど、つじつまが合いませんどうもリアリティがない。

では、祖母の不信心と「さわらぬ神に祟り無し」という言葉をどういう風に結びつければいいのか。やっぱりあまり馬鹿正直に結びつけてもしょうがないんじゃないかと思う。

「祖母」なら「祖母」、**「祖母の不信心」**なら「祖母の不信心」と、何か対象を設定してそれについて考えるとき、つい垂直的に掘り下げて考えがちになってしまうけれど、垂直的に掘り下げる思考法自体が近代の教育の産物で、祖母がほとんど寝たきりになってもなお不信心を通した理由なんかもあんまり厳密に考えても仕方ないことなんじゃないかと思う。

「おばあちゃんもうまいこと言ったもんだよね」という母の解釈もまんざら当たっていないこともなくて、ユーモアやウィットという意識的なものではなくて、カン違い・誤解・早とちりのような意識しないおかしさと考えれば、まあそんなもんなんじゃないかと思う。

と、ここまで書いてもう一つ祖母の言葉を思い出した。これも母から聞いた話だけれど、まだ元気だった頃、母が「どうしてそんなに不信心なんだ」と言うと、祖母は「仏さんに手を合わせなければならぬようなことをした覚えはない」と答えたそ

うだ。

3 こんな言葉を出すとなんだか決定打のようで、この決定打を導き出すためにわざわざここまで話を引つ張つたようにみえるかもしれないが、ほくはこれも決定打とは思わない。祖母は負けず嫌いで強情だったから、自分の不信心を人から非として責められれば、反発からこういう答えを返しもしただろうし、不信心を自分に向かつて正当化するためにも、いくらかは本気で、こういう風に考えている必要があつたのではないかと思う。

普通の人たちの理解するところの宗教は、キョウギを学んだりそれによって生活を律したりするものではなくて、現世的な救済をしてもらうものだ。祖母の言葉も同じ宗教観を表している。祖母にとって、仏さんに手を合わせている姿を人に見られることがすでに、悩んだり困つたりしているのと同等の意味を持つていたということだったのかもしれない。負けず嫌いの人間は、いま自分が悩んだり困つたりしていることを自覚することさえも嫌う。

しかし、「仏さんに手を合わせなければならぬ」ということをした覚えはない」という言葉と「さわらぬ神に祟り無し」という言葉は一致しない。同じ一つの考えからこの二つの言葉は出てこない。部分として筋が通つても全体としての一つの原理なり法則なりは出てこない。祖母はそのつどいろいろな答えを出したけれど、結局は全部、その場の言い逃れか反発心だったのだと思う。だから、どうしてあそこまで頑固に信心しなかつたのかは、相変わらずわからない。

しかしこういう風にいろいろ考えてみてそれでもわからないと思うことが、「わかっている」という状態を指すのかもしれない。ほくは祖母が好きで、祖母について考えることがほくが何かを考えることの原型の一つにもなっているし、ほくの考え方や感じ方や反応の原型には祖母の考え方や感じ方や反応があると感ずることがあるのだから、祖母が残した手掛かりに対応する仮説をほく自身に出していくことができれば、それでじゅうぶん「わかっている」ということになっているのかもしれないとも思う。

(保坂和志「私」という演算」より。文章を一部改変した)

問一 傍線部ア～エのカタカナを漢字に直し、解答欄に記せ。

問二 傍線部1「祖母のように」クオリティ・オブ・ライフ「らしい有意義な過ごし方といっても神仏を拝むことぐらいしか考  
えつかない種類の人間の場合、話はそうそう近代的にすつきりとはいかない」とあるが、筆者がこのように述べているの  
はなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 祖母の不信心を近代的な価値意識によって解釈することは、祖母の本当の気持ちを無視することになるから。
- イ 近代的な考え方をする祖母は、残された時間の質を高める方法として神仏を信心することなど考えないから。
- ウ 祖母の信心の問題を、神仏を否定する傾向にある近代の価値観によって割り切ってしまうことはできないから。
- エ 祖母の不信心を、田舎暮らしで近代的な教育を受けていないがゆえの頑固さとみてしまうことは良くないから。
- オ 祖母の不信心は、人生や生活の質に重きを置く近代的な価値観によって単純に説明されるものではないから。

問三 傍線部2「母はそれを祖母のユーモアとかウィットと解釈している」とあるが、母は祖母の言葉をどのように解釈したと  
筆者は考えているのか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 祖母が自分の本当の信心を隠すために、わざと「神」という言葉を滑稽な意味で使っていると解釈している。
- イ 祖母が自らの不信心を正当化するために、ことわざを文字通りの意味に解して利用していると解釈している。
- ウ 祖母が神仏に対する恐怖を、冗談めかしてことわざを用いて表現することで紛らわしていると解釈している。
- エ 祖母が自分の不信心を人にとがめられるのが嫌で、わざと神を信じている風を装ったものと解釈している。
- オ 祖母が怖れから神仏に触れないようにしていることを、ことわざを使つてうまく表現したと解釈している。

問四 空欄

X

に入る言葉として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 常識                      イ 道徳                      ウ 人知                      エ 意識                      オ 実在

問五

傍線部3「こんな言葉を出すとなんだか決定打のようで」とあるが、直前に書かれている祖母の言葉が、祖母の信心に関する解釈の「決定打」のように思われるのはなぜか。つぎの形式に従って、三十字以上四十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

ように思われるから。

問六

本文の表現上の特徴を説明したものとして適切でないものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人物の述べた言葉や内容の上で重要な表現を省略することなく何度も繰り返して、ていねいに叙述を進めている。  
 イ 難しい言葉はあまり使わず、また随所に話し言葉のようなくだけた表現を用いて、柔らかい語り口で記述している。  
 ウ 中心となる話題についてさまざまな角度から検討しながら、徐々にはっきりした結論を導き出すように書かれている。  
 エ 方言を織り交ぜたり誰かの発した言葉をそのまま書いたりすることによって、人物たちの内面を明瞭に描いている。  
 オ 主題に関して異なる解釈を次々に示すことで、筆者の思考の流れのままに書きつづっているような印象を与えている。



問七 筆者の考えと合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 祖母くらいの年代の人にとっては、神や仏に手を合わせて拜むことが残された時間を有意義に使うことと同義であるはずだが、祖母は残りの時間を有意義に使うという意識をもともと持っていなかったと思われる。

イ 祖母の信仰について「無神論」と言わず「不信心」という言葉を使ったのは、祖母が本当のところは神仏を信じ、怖れてもいたと思われるからであり、それが祖母の言った二つの言葉によく表れている。

ウ 祖母なり、祖母の不信心なりについて一貫した解釈を求めようとするのは難しいことであるが、それについてさまざまに考えをめぐらし続けていけば、いずれ祖母の本当の考えを理解できるようになるだろう。

エ 祖母が自分の不信心について語った言葉はどれもその場しのぎのものだったと思われる、なぜ最後まで頑固に不信心を貫いたかという理由もわからないままだが、その答えを出すこと自体は本質的なことではない。

オ 祖母の不信心は、神や仏に手を合わせることを強要する親戚たちへの反発心と負けず嫌いがもたらしたものであり、それゆえに寝たきりになっても死ぬまでそれを改めることができなかつたのだろう。

●以下の問題〔四〕〔五〕は、文学部日本文学科を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

\* 嘉祥寺僧都海惠かいゑといひける人の、いまだ若くて病大事にて、限りなりけるころ、<sup>A</sup>寝入りたる人、にはかに起きて、「そこな  
る文、など取り入れぬぞ」と、厳しく言はれけれども、さる文なかりければ、<sup>1</sup>うつつならずおぼえて、前なるものども、あき  
れあやしみけるに、自ら立ち走りて、明かり障子をあけて、<sup>\*</sup>たてぶみをとりに見れば、ものども、まことにふしぎにおぼえ  
て見る程に、これを広げて見て、しばしうち案じて、<sup>かへりこ</sup>返事書きてさし置きて、<sup>B</sup>又やがて寝入りにけり。

起き臥しもたやすからずなりたる人の、いかなりける事にかと<sup>a</sup>あやしみける程に、しばし寝入りて、汗おびたたく流れて、  
起き上がりて、「ふしぎの夢を見たりつる」とて語られける。

「<sup>\*</sup>大きな猿の、<sup>\*</sup>藍摺りの水干着たるが、<sup>c</sup>たてぶみたる文を持ちて来つるを、人の遅く取り入れつるに、自らこれを取りて  
見れば、歌一首あり。

<sup>2</sup> たのめつつこぬ年月をかさぬれば朽ちせぬ契りいかがむすばん  
とありつれば、御返事には、

心をはかけてぞたのむゆふだすき七のやしろの玉のいがき齋垣に

と書きてまゐらせつるなり。これは山王さんおうよりの御歌をたまはりてはべるなり」と語られければ、前なる人、あさましくふしぎ  
に覚えて、「これは、ただ今、うつつにはべる事なり。これこそ御文よ。又、<sup>b</sup>書かせ給へる御返事よ」と言ひければ、<sup>\*</sup>正念に住  
して、前なる文どもを広げて見けるに、つゆたがふ事なし。

その後、病息りにけり。<sup>3</sup>いとふしぎなり。

〔今物語〕より

【注】

\* 嘉祥寺

京都の寺院。仁和寺の別院。

\* 海恵

仁和寺守覚法親王の門弟の僧。

\* たてぶみ

正式な包み方をした手紙。

\* 猿

日吉山王神の使者とされる獣。

\* 藍摺りの水干

藍の葉でつくった染料で模様を摺った衣装。

\* ゆふだすき

木綿で作ったたすき。神事を行う際に神官がかけるもの。

\* 七のやしろ

日吉山王神の社。

\* 齋垣

神聖な垣。

\* 正念

雑念をはらって一心に神仏を念じること。

問一 傍線部A「限りなりけるころ」B「やがて寝入りにけり」C「人の遅く取り入れつるに」の本文中における意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A 「限りなりけるころ」

ア ようやく病気が平癒したという時

イ いよいよ命も尽きてしまったかという時

ウ もはや治療も限界だという時

エ すでに病気が最悪の状態となつてしまった時

オ 早くも苦しみが終わりに近付いたという時

B 「やがて寝入りにけり」

ア しばらくして寝入ってしまった

イ 完全に寝入ってしまった

ウ うとうとと寝入ってしまった

エ ゆっくりと寝入ってしまった

オ すぐに寝入ってしまった

C 「人の遅く取り入れつるに」

ア 人がすでに取り入れてしまったので

イ 人がようやく取り入れようとしているので

ウ 人が取り入れようとするのに遅れをとるので

エ 人がなかなか取り入れなかったので

オ 遅れながらも人が取り入れてしまったので

問二 波線部a「あやしみ」b「書か」の動作の主体は誰か。最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 海恵

イ 前なるものども

ウ 大きな猿

エ 山王

オ 作者

問三 傍線部1「うつつならずおほえて」を現代語訳し、解答欄に記せ。

問四 傍線部2「たのめ」の①活用の種類と活用形、②本文中の意味として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 「たのめ」の活用の種類と活用形

ア 四段活用の連用形

イ 四段活用の已然形

ウ 四段活用の命令形

エ 下二段活用の未然形

オ 下二段活用の連用形

カ 下二段活用の命令形

② 「たのめ」の本文中の意味

ア 信頼する

イ 希望する

ウ 依頼する

エ 期待させる

オ 心配させる

問五 本文の内容と合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 病にうなされた海恵は、病床に臥せている一人の男が突如起き上がるという夢を見た。

イ 夢の告げに従って、文を自ら取りに行った海恵は、そこに文がないことを不審に思った。

ウ 病に苦しむ海恵は、立ち上がることも出来ず、ただおびただしい汗を流すばかりであった。

エ 日吉山王神からの歌を授かった海恵は、神にすがる気持ちを自ら和歌にしたためた。

オ 海恵が語る不思議な夢の話聞いた人々は、大きな猿が実際に訪れたことを語り合った。

問六 傍線部3「いとふしぎなり」とあるが、どのような点が「ふしぎ」なのか。つぎの形式に従って、四十五字以上五十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

という点。

国語

問七 『今物語』は鎌倉時代の説話集であるが、つぎの中から鎌倉時代の文学作品ではないものを二つ選び、解答欄の記号をマ  
ークせよ。

- ア 建礼門院右京大夫集
- イ 方丈記
- ウ 大鏡
- エ 古今著聞集
- オ 発心集
- カ 更級日記

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

辛<sup>しん</sup>毘<sup>び</sup>字<sup>ハ</sup>佐治、<sup>A</sup>穎<sup>えい</sup>川<sup>せん</sup>陽<sup>やう</sup>翟<sup>てき</sup>人<sup>ナリ</sup>文<sup>ナリ</sup>帝<sup>ナリ</sup>踐<sup>ふみ</sup>阼<sup>そつ</sup>、<sup>ウツル</sup>遷<sup>ウツル</sup>侍<sup>ナリ</sup>中<sup>ニ</sup>帝<sup>ナリ</sup>欲<sup>ス</sup>徙<sup>うつシ</sup>冀<sup>き</sup>州<sup>シウ</sup>

士<sup>シ</sup>家<sup>カ</sup>十<sup>シウ</sup>万<sup>マン</sup>戸<sup>コ</sup>、<sup>ミタセント</sup>実<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>河<sup>カ</sup>南<sup>ナン</sup>時<sup>ジ</sup>連<sup>レン</sup>蝗<sup>シュウ</sup>民<sup>ミン</sup>饑<sup>ウ</sup>群<sup>クン</sup>司<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>不<sup>ト</sup>可<sup>ト</sup>而<sup>ル</sup>帝<sup>ニ</sup>

意<sup>イ</sup>甚<sup>シ</sup>盛<sup>セイ</sup>。毘<sup>ビ</sup>与<sup>ニ</sup>朝<sup>チウ</sup>臣<sup>ニ</sup>俱<sup>ニ</sup>求<sup>ム</sup>見<sup>レ</sup>。② 帝<sup>テイ</sup>知<sup>チ</sup>其<sup>キ</sup>欲<sup>ヨク</sup>諫<sup>ケン</sup>、作<sup>サス</sup>色<sup>シキ</sup>以<sup>テ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。③ 皆<sup>カヘ</sup>

莫<sup>ム</sup>敢<sup>カン</sup>言<sup>フ</sup>。毘<sup>ビ</sup>曰<sup>ク</sup>、陛<sup>ヘイ</sup>下<sup>カ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>臣<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>肖<sup>シウ</sup>、置<sup>キ</sup>之<sup>ヲ</sup>左<sup>サ</sup>右<sup>ウ</sup>、厠<sup>マシフ</sup>之<sup>ヲ</sup>謀<sup>マウ</sup>議<sup>ギ</sup>之<sup>ヲ</sup>官<sup>カン</sup>。

④ 安<sup>アン</sup>得<sup>デ</sup>不<sup>レ</sup>与<sup>ニ</sup>臣<sup>ノ</sup>議<sup>ギ</sup>。臣<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>言<sup>フ</sup>非<sup>ズ</sup>私<sup>ニ</sup>、乃<sup>チ</sup>社<sup>シャ</sup>稷<sup>ジキ</sup>之<sup>ノ</sup>慮<sup>リョ</sup>也<sup>ト</sup>。帝<sup>テイ</sup>不<sup>レ</sup>答<sup>ヘ</sup>、起<sup>チ</sup>入<sup>ラントス</sup>。

内<sup>ニ</sup>毘<sup>ビ</sup>随<sup>ヒテ</sup>而<sup>シテ</sup>引<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>裾<sup>ソ</sup>、帝<sup>テイ</sup>遂<sup>ニ</sup>奮<sup>ツテ</sup>衣<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>還<sup>ラ</sup>。良<sup>ヤ</sup>久<sup>ヒシウシテ</sup>乃<sup>チ</sup>出<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>、卿<sup>ケイ</sup>持<sup>スルコト</sup>我<sup>ヲ</sup>

何<sup>ソ</sup>太<sup>タ</sup>急<sup>キヤク</sup>邪<sup>ト</sup>。毘<sup>ビ</sup>曰<sup>ク</sup>、今<sup>イマ</sup>徙<sup>サバ</sup>既<sup>ニ</sup>失<sup>ハン</sup>民<sup>ミン</sup>心<sup>シン</sup>、又<sup>マタ</sup>無<sup>カ</sup>以<sup>テ</sup>食<sup>ハルコト</sup>。帝<sup>テイ</sup>遂<sup>ニ</sup>徙<sup>セリ</sup>其<sup>ノ</sup>半<sup>ハツ</sup>。

〔「蒙求」より〕

【注】

\* 潁川陽翟

潁川郡陽翟県。現在の河南省禹県。

\* 文帝

三国時代の魏の初代皇帝。曹丕。

\* 践阼

皇帝の位につく。

\* 侍中

官名。皇帝の近侍として宮中に入入りした官。

\* 冀州

現在の河北省南部・河南省北部に当たる地域。

\* 河南

黄河以南の地。

\* 蝗

いなご。農作物を食い荒らす害虫。

\* 群司

大勢の役人。

\* 厠

まじえる。身を置く。

\* 謀議之官

天下の大事を謀り議する官。

\* 社稷

土地の神と穀物の神。転じて、国家を指す。

問一 波線部A「字」B「俱」C「太」の読み方を、ひらがなで解答欄に記せ。

問二 傍線部①「帝意甚盛」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 帝は国家を繁栄させるため、父の遺訓を順守することに必死だった。

イ 帝は冀州の士の家十万户を、あくまでも河南に移住させようとした。

ウ 帝は蝗の害を防ぐための方策を、大勢の役人に提案させようとした。

エ 帝は臣下との関係の重要性を理解しており、面会に乗り気であった。

オ 帝は役人たちの提案を評価し、蝗を全滅させようと意気盛んだった。



問三 傍線部②「帝知其欲諫、作色以見之」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 帝は父の遺した諫戒の言葉を思い起こし、厳しい表情で臣下と会った。

イ 帝は過去の直諫が改められないことを知り、顔色を変えて臣下と会った。

ウ 帝は諫言が忠誠によるものなのか確かめるため、思案しつつ臣下と会った。

エ 帝はどんな直諫をしてくるのか知りたくて、作り笑いを浮かべて臣下と会った。

オ 帝は自分が諫言されることを察し、怒りの様子もあらわに臣下と会った。

問四 傍線部③「皆莫敢言」をひらがなのみの書き下し文にして、解答欄に記せ。

問五 傍線部④「安得不与臣議」の書き下し文は、「安くんぞ臣と議せざるを得んや」であるが、これに従って、解答欄の文に返り点をつけよ。

問六 本文において辛毘はどのような人物として描かれているか。つぎの形式に従って解答欄に記せ。

人物。